

AAG Annual Meeting (アメリカ地理学会年次総会)

参加報告

2019年4月9日

広域科学専攻(広域システム科学系) 人文地理学教室

博士後期課程3年 藤井 毅彦(松原研究室)

「博士課程学生のための国際研究集会渡航助成(平成30年度第2回)」のご支援を頂きまして、2019年4月3日から7日まで、アメリカ合衆国 Washington D.C.市の Marriott Wardam Park, および, Omni Shoreham で開催された「AAG Annual Meeting (アメリカ地理学会年次総会)」に参加しました。この会議は、American Association of Geographers (アメリカ地理学会)が毎年1回、開催する米国地理学関連では最大の学会です。また、他国からの参加も多く、International Geographical Union (IGU, 国際地理学連合)が原則として隔年で開催する国際学会である「International Geographical Congress (国際地理学会議)」と並ぶ、地理学の分野では、最も権威のある会議のひとつです。

今回、私は、Labor and Mobility という経済地理学に関するセッションで、「Relocations of Geography-related IT Industries - a case study in China since 1990'」という題で口頭発表を行いました。発表内容は、地理関連のIT産業の立地がどのように変遷していったかを、1990年代以降の中国を事例として、特に新興企業の立地変遷に注目した調査・考察です。

昨年8月に参加・発表した国際地理学会議ではITやベンチャー企業、その起業家に関する発表はあまり見当たりませんでしたが、本学会では、関連するセッションが多く設けられており、また、最近、注目度が高いフィンテック(金融IT)やAI(人工知能)などのセッション、発表もあり、非常に参考になりました。本学会への参加は今回で3回目となりますが、時代のダイナミズムを感じることができるアメリカならではの学会という特色を感じます。

本助成により、このような貴重な経験をする機会を持って、本当にありがとうございました。



写真 アメリカ地理学会年次総会の受付写真(筆者撮影)